対格表示の「を」について

On "wo" Indicating the Objective Case

木之下　正　雄
Masao KINOSITA

日本語の対格表示は，格助詞ナシが本来であって，ヲは感動助詞から転じたものである；万葉時代のヲは感動の気持が強く，まだ未分化の要素を多分に持っているので，万葉集より遠くない以前に対格助詞に転じたのだろう，というのが通説である。が松尾拾氏は，平安初期までは，ヲを格助詞とすればいろいろな矛盾があるので格助詞とは認めがたいとされ，感動助詞であることを消極的に結論された（国語と国文学13年10月，橋本博士還暦記念国語学論集）。それを承けて，広井玲子氏が宇津保物語について（東京女子大「日本文学」９号），小山敦子氏が源氏物語について（国語学33輯）調査の結果，ヲは抒情・情緒・悲愁・詠嘆・荘重・厳粛・深刻な場面や漢文訓読語脈に，助詞ナシは羅列形式の説明・記述や切迫・昂奮・口語的省略に多く用いられると述べて，ヲが感動の意味を表わすことを積極的に結論された。

通説に対して，村山七郎氏は（万葉集大成６の林大氏の紹介による），（ア）ヲは満洲語・ツングース語の対格の附属辞と音韻上対応を持つ，（イ）助詞ナシは不定格であって，対格と不定格との対立関係は北アジア言語にも認められる，（ウ）ヲの間投的用法は対格表示の用法からの転用である，と主張される。

日本語では，語と語との関係において，

（１）概念部（体言，形容詞の語幹，動詞の語幹または連用形）に，格助詞または活用語尾を附けて，受ける語との格関係を表わす形式，

（２）概念部のままで下の語に係る形式，

（３）係助詞を附けて，題目として提示する題目叙述関係の形式，

がある。

(2)には次のような場合がある。

針袋，これはたばりぬ（万4133）

来鳴かなく，そこは恨みず（万4207）

「針袋」「来鳴かなく」は，その語を卓立的に示すために下文から独立させ，下文との関係については「これ」「そこ」で代理させる。（「これ」「そこ」は，素材的には対象と動作との関係にあるが，表現としては題目と述語の関係にある）。この文は代理語なしで「針袋たばりぬ」「来鳴かなく恨みず」ということもでき，その場合完全な独立でないにしても半ば独立的であって，卓示されている。

また，「夢を見る—夢見る，夢見」のように，概念部「夢」が，下の語と複合して，一語として

独立して下の動詞と対立する力を失う場合もある。格助詞ナシは，格表記のある形式に対応するので，対格以外にも用いられる。例えば領格の「山の陰—山陰」「青き海原—青海原」「慰むる所—慰め所」など。(2)の格表示ナシには，概念部そのままで，独立語に近い卓示から，一語としての独立性を失う複合語を作る場合までがあるのである。

ヲと助詞とは，「堅塩を取りつづしろひ，糟湯酒△うちすすろひて」(万 892)，「花橘を見には来じとや」(万1990) と「藤波△見には来じとや」(万1991) など，意味上同じで，その使いわけは意味以外の，例えば音数関係によると思われるものも多い。しかし，ある条件のもとではヲを多く用いるとか助詞ナシが多いとかの著しい傾向差があるとすれば，その条件を考えることによって，ヲと助詞ナシの微妙な差違が明らかになると思われる。広井氏や小山氏はそれを表現場面に求められた。が，語と語との関係，文の構造にも傾向差があり，その方がヲと助詞ナシの本質に基づくと思われる。

1　名　詞　法

「歌よみ」「手習ひ」「文通はし」(「御息所とこそ文通はしもこまやかにし給ふめりしか」夕霧四135)(注1) など，複合語とされるものは格助詞ナシである。これらは対象—動作の関係ではあるが，全体が一語として統合されるために，客語は動詞に包まれて，動詞と対立する力を失っている。

複合語までにはならない「客語—動詞の名詞形」も助詞ナシが多い。(土佐　を0—ナシ3，源氏を11—ナシ70)。

1　車とめて (老尼ガ浮舟ニ) 湯△参りなどし給ふ (手習五 350)

2　なほ試みに，暫し湯を飲ませなどして，助け試みむ (手習五 345)

1の「湯参り」は平板に事象を述べるだけであり，この言い方が普通であるが，2は，何を飲ませるか，水などでなく，もっと親切に湯を飲ませて，という気持で，「湯」にも重みを置いて動詞と対立させた言い方である。源氏物語の名詞法では，ヲは2の例以外は修飾語の附いた例ばかりで，助詞ナシは修飾語のない例が多い。ヲのある客語は特に重みが置かれる場合だと考えられる。こうした，客語にも重みを置いて，動作の対象としての意識の強弱がヲの有無となって表わされるのだと思われる。

2　目的法

	万	古(歌)	古(詞)	土	源
を(注2)	8(1)	0	3	0	4
ナシ	18(1)	4	4	1	26

名詞法の一種で，複合語とされる場合があるくらいに客語は動詞に包まれる。

3　源氏の中将の，わらはやみ△まじなひに物し給ひけるを(若紫一 186)

は複合語とも二語とも見られようが，

4　…と宣ひて，対に童べ△召しにつかはす (若紫一 228)

は二語であろう。

5　(浮舟ノ死ガ不審ナノデ) 例の人々召して右近を迎へにつかはす (蜻蛉五 295)

4が平板に事象を述べているのに比べて，5は，他の人でなく，真相を知る鍵の人右近を，という

気持である。人名をあげることはそれだけの重みが必要な場合が多いので，人名にはヲの附くことが多い。

6　中宮の今宵まかで給ふなる△とぶらひに物し侍らむ（賢木一 396）

7　われ斯く悲しびを極め，命尽きなむとしつるを助けに翔り給へる（明石二63）

準体言はヲをとることが多いのであるが，6は叙述を中断卓示してから，動詞に係る。7は何を助けにであるか，処置の対象を明らかにする言い方である。

古今集詞書でヲが比較的多いのは，公的な文章では，なるべくヲを用いることになっていたからであろう。

3　傾向差の著しい動詞

客語がヲをとるか助詞ナシになるかの傾向は，動詞によって異なることがある。

(1)　動作内容―す

「しるべ（船出，案内，消息）―す」のように，「動作内容―す」の構造はヲをとることが少ない。

8　御八講のいそぎをさまざまに心づかひ△せさせ給ひけり（賢木一 399）

対象として強く意識するのは「いそぎ」で，それにはヲを用いる。「心づかひ△す」は一語のように機能し，「心づかひ」は対象としての意識が弱いので助詞ナシになる。

9　すべていかなる方にも，この世に執とまるべきことなくと心づかひをせしに（幻四 204）

は「心づかひ」に重みをおいたのである。こんな場合もあるが，この構造では対象意識が弱くて助詞ナシになるのが普通である。

(2)　ヲを多くとる動詞

		万	古	土	源
さす（指）	を	13	1	1	3
	ナシ	1	0	0	0
おふ（追）	を	0	0	5	0
	ナシ	0	0	0	0
はじめ（て）	を	2	0	0	19(2)
	ナシ	0	0	0	1
おきて（措）	を	6	3	0	19(7)
	ナシ	0	0	0	0
いのる（祈）	を	7	1	3	2
	ナシ	0	0	0	0
頼む（四段）	を	2	2(3)	0	24(11)
	ナシ	0	1	0	1(1)
頼む（下ニ）	を	3	1	0	2(1)
	ナシ	0	0	0	0
（事物）よむ	を	0	52	0	0
	ナシ	0	0	0	0
（事物）見てよむ	を	0	41	4	1
	ナシ	0	0	0	0
（歌）よむ	を	0	4	1(1)	1
	ナシ	0	8	4	6(1)

（カッコ内は他の助詞がある場合。以下同じ。古今集は，この表では詞書を含む。）

10　この宿りをさしてく（明石二63）

11　浦戸より漕ぎ出でて大湊を追ふ（土佐12月28日）

12　院をはじめ奉りて（葵一 335）

三語とも，目的点や起点を明らかにすることが重要であるような動詞である。

13　この君だちをおきてほかには（匂宮四 229）

除外されるものが何であるかを明らかにすることに重点がある。「を―助詞」の7例はすべてヲバであって，「おきて」が，除外するものを意識することがどんなに強いかを示す。除外する意味の「放ちて」も，

14　明石の君を放ちては（若菜下三 343）

のように，ヲをとるのが普通である。

「いのる」は，万葉集や土佐日記では「…について神仏を祈る」の形式であるが，源氏物語では「…を神仏に祈る」の形式である。祈る行為によって処置する対象が，動かそうとする神仏から，得ようとする事物の方に移っている。がどちらの場合も，対象は強く意識されるのでヲをとる。

頼む（四段）

15　神仏を頼み奉りて（明石二81）

頼みに思う相手を対象にし，「事物を人や神仏に頼む」の言い方はしない。「を―ば，ぞ，なむ」のように強調した言い方が８例もある。助詞ナシの１例は，

16　仏の御しるし△今はかの暗き道のとぶらひにだに頼み申すべきを（御法四 183）

で，卓示である。

頼む（下二段）

万葉集では「吾を頼めて」（万 740）のように，頼みに思わせる相手を客語にするが，源氏物語では，

17　限りなく深きことを頼め契り給へれば（総角四 440）

のように，頼みに思わせる事物を客語にする。「祈る」「頼む」のような動詞は，何を動かそうとするか，その対象を強く意識するような動詞で，ヲをとることが多い。

よむ（詠）

歌の素材を対象とする場合は，

18　雪の降りけるをよめる（古９）

のようにヲをとる。古今集の詞書がすべてこうなっているのは，これが規格的な言い方だったからであろう。どんな素材をよむかを明らかにすることに重点がある場合である。

「見てよむ」「聞きてよむ」もヲをとる。土佐日記も同様である。一般に，「○○―見（聞き）て―△△する」のように，感覚器官で対象をとらえて，それを次の動作の契機にする場合は，対象として強く意識されるので，ヲをとることが多い。（古今集・土佐日記はすべて。源氏物語は　を63　助詞ナシ４）

助詞ナシの場合は，

19　夢△見給ひて，いとよく合はする者召して合はせ給ひけるにも（蜻二 438）

20　造らせ給ふ御堂△見給ひて，すべき事ども掟て宣ひなどして（宿木五119）

次の動作の契機にする意味合いが少なく，単に事象を平板に述べるだけの場合である。

「歌―よむ」で「歌」に修飾語のないのは，助詞ナシは14例あるが，ヲをとるのは僅かに１例（他に「をぞ」１例）に過ぎず，ヲをとるのは修飾語があって「歌」に重みのある場合である。修飾語がなくてヲをとっている例も，

21　生きとし生ける者いづれか歌をよまざりける（古今序）

のように，「歌」が文の中心になってそれに重みのある場合である。そして修飾語があって助詞ナシになるのは，

22　秋の夜惜しむ歌△よみけるついでに（古 190）

のように事象を平板に述べる場合である。

4　傾向差の著しい名詞

松尾拾氏は，ヲを多くとる語として，人・代名詞・事・由・準体言を，助詞ナシになる語として，もの・歌・きぬ（衣）・酒・禄・御ぐしを，あげていられる。調べればこれ以外にもいろいろあると思われるが,「世」と「身」もヲを多くとる。それを述べる前に「もの」について述べよう。

(1)　もの

源氏物語における客語の「もの」を，動詞に直ちに接するか，語を隔てて接するかという点から分ければ次表のようである。

	連体		準体		終止		中止		命令	
	直	隔	直	隔	直	隔	直	隔	直	隔
を	15(3)	13(1)	1(2)	3(1)	9(9)	0(2)	18(7)	7	0	0
ナシ	88	2	33	0	30	5	34	7	5	1

助詞ナシがヲより多いのであるが，連体（隔）・準体言（隔）ではヲが多い。また連体（直）・準体言（直）・命令では助詞ナシが圧倒的に多いが，終止・中止ではそれほどではない，というように，多少の相違がある。

連体・準体言では「物—思ふ」が多く，それがヲをとるもの，連体（直・隔・助詞を含む）32例のうちの28例，準体言7例のうちの6例を占める。助詞ナシでも，連体88例のうちの51例，準体言33例のうちの12例（他に助詞1例）がある。

23　物△思ふ人の魂は（葵一 334）

24　いみじく物を思ひ給へりしさまを思ひ出づるに（蜻蛉五 277）

前者は被修飾体言の性質を一般的に規定する場合で「物」は対象意識が弱く，後者は具体的に指摘できるような物思いで深刻である。「物—思ふ」は前者のような使い方が多く，そしてこれは直接して使われることが多いために，連体（直）・準体言（直）では助詞ナシが圧倒的に多くなる。が，具体的で深刻な物思いは,「物—思ふ」の間に，情態修飾語や「形容詞—と」（7例）が入ることが多いので，連体（隔）・準体言（隔）ではヲが多くなるのである。

命令は「物」以外の客語の場合も助詞ナシがやや多い。

終止（直）・中止（直）は，

25　朝廷よりも多く物△賜はす（桐壺一44）

26　中宮は物△隔ててねたう聞召しけり（胡蝶二 398）

事象を平板に述べて，助詞ナシになる。

27　（時方ハ侍従ニ）わが沓を履かせて，みづからは供なる人のあやしきものを履きたり（浮舟五 270）

何を履いたかに関心があって,「物」は具体的事物をさし，それを処置するという気持が強い。コソ

・サヘなどで強調する例が多いのは「物」に重みがあるからである。助詞ナシには強調の助詞の附いた例は見えない。

終止（隔）・中止（隔）は，

28　そのさきに物△一こと聞えさせおかむとてなむ（若紫一 224）

29　紅といふもの△いと赤らかにかいつけて（常夏三35）

のように，後に説明のある場合，具体的事物を総称する場合など，卓示が多い。ヲをとる場合は，

30　物をまことにあはれとおぼし入りて（須磨二38）

のように，「形容詞―と」や情態修飾語が入る場合が多い。

このように，「もの」は全般的には助詞ナシが多いのであるが，言い方によって多少の相違があるのである。

(2)　世

「世」はヲをとることが多い。（を176例，他に助詞12例；助詞ナシ２例，他に助詞５例）。「世」が一音節のためかとも思われるが，「この世」（を11例，助詞ナシ２例），「世の中」（を61例，助詞ナシ10例）も同様にヲが多い。そして同音の「夜」は助詞ナシが少なくない（を７例，助詞ナシ８例）。「世」がヲを多くとるのは，「世」が対象として強く意識されるような性質の語であったからと思われる。

「世」を客語とする他動詞は「背く」「捨つ」「離る」の順である。強い覚悟を必要とするこれらの行為では，処置の対象を強く意識するのは当然である。続いて「世を経る」が多い。「経る」は自動詞としても用いられるくらいで，「月日△経て」のように客語は助詞ナシになることが多いが，常に「世を経る」のように用いられるということは，「世」が，「経る」の対象として強く意識され，重みがおかれるような性質の語だったということになろう。

(3)　「身」も，「捨つ」「投ぐ」などの動詞の客語となる例が多く，対象として強く意識されるので，ヲをとることが多い。（を104例，助詞ナシ６例。「御身」を14例，助詞ナシ０）。

5　文の構造によるもの

(1)　客語○○―客語△△―動詞（二重客語）

31　中宮は…御八講のいそぎをさまざま心づかひ△せさせ給ひけり（賢木一 399）

32　け遠き木立にふくろふの声を朝夕に耳△馴らしつつ（蓬生二 138）

「△△―動詞」（心づかひす，耳馴らす）は緊密に結合して複合語と見ることもでき，△△は対象としての意識が弱い。対象として意識されるのは，遠い関係にある○○である。

33　大坂に逢ふやをとめを道△問へば（記77番）

34　世の常の人をば目△とどめ耳△立て給はず（蓬生二 159）

35　心ざしありつる郡司の妻をうしろめたなき心△つかはんこといとほしけれど（宇治拾遺 256）

「△△―動詞」は二語であるが，それが結合したものが○○を対象とする。二重客語では，近い関係の「△△―動詞」は一語のように機能して対象意識が弱くて助詞ナシになり，遠い関係の○○は

対象意識が強くてヲをとるのが普通である。

△△がヲをとることもある。

36　わが父おとどを人知れず目をつけ奉り給へれど（行幸三68）

37　そこはかとなくて過ぐしつる年月は，何事をか心をも悩ましけむ（明石二85）

助詞ナシの場合より「目」「心」にも重みをおいた表現である。

38　この頃受領どもの面白き家造り好むが，この宮の木立に（河本を）心を（河本ナシ）つけて（蓬生二139）

△△の対象意識が強く，そのために○○は処置の対象から除外されて動作の目標になってニをとったのである。現代語ではこの形式が普通であるが，古代語では○○を処置の対象とする意識が強かったので，それがヲをとり，△△は対象意識が強い場合だけヲをとったのである。

(2)　客語—形容詞（終止形）—と—思ふ

	万	古	土	源
を	12	7 (3)	1 (1)	248(27)
ナシ	0 (2)	2 (1)	0	10(30)

39　藤壺の御有様をたぐひなしと思ひ聞えて（桐壺—50）

40　…と（源氏ガ）宣ふさま△（右近尉ハ）物めでする若人にて，身にしみてあはれにめでたしと見奉る（須磨二26）

41　（末摘花ノ）気色△をかしとおぼしたり（末摘花— 239）

「御有様ガたぐひなし」「気色ガをかし」という主語述語の関係の判断を，主語を判断主体の「思ふ（見る，言ふ）」の客語にした形式である。39はヲがあるために，客語であることが明瞭である。40・41は主語か客語か明らかでないが，40は，右近尉の説明が挿入されて，「さま」は「見」の客語と思われる。41も，「『気色ガをかし』とおぼす」（大系）とも解されるが，「気色ヲ『をかし』とおぼす」と解すべきであろう。この形式は，「『気色ガをかし』とおぼす」の直接話法と，「気色ヲをかしくおぼす」の間接話法との中間話法である。動作の対象を明確に示すとともに，判断の部分だけは直接話法として言う形式である。この形式は，源氏物語などでは現代語より多く用いられたと思われる。

40・41のような助詞ナシは卓示である。それで文初に置かれる。

42　今宵なむはじめて憂しと世を思ひ知りぬれば（空蟬— 109）

のように，「形容詞—と」の後に助詞ナシの客語が来る例は見えない。

この形式では，何をそう思うかという対象意識が強いので，ヲをとることが多い。「もの」は助詞ナシになることの多い語であるが，この形式では「ものを」になる例だけである。また，「を—ば，ぞ，こそ」の例が15例もあって，対象を強調することが多い。それで，動詞に包まれる場合がなく，助詞ナシは卓示する場合だけであるので，助詞ナシが少ないのだと思われる。

(3)　客語—形容詞（連用形）—思ふ

	万	古	土	源
を	7	0	0	205(45)
ナシ	0	0	0	28(74)

43　怪しくなべての世△すさまじく思ひ給ひけるなるべし（柏木四35）

44　なべての世の厭はしくおぼしなりて（鈴虫四89）

44によれば，43の「世」も主語として意識されたとも思われるが，上表の数に入れた。

前項の間接話法で，ヲをとることが多い理由は前項と同じである。

助詞ナシは文初に用いられて，

45　さすがに煩はしう物の聞えを思ひて（行幸三84）

のような語順の例はない。また，「ものを」となること，「を―ば，ぞ，だに，さへ」が29例もあることなど，前項と同じである。格助詞ナシに他の助詞の附いた例は74例もあるが，コソ，ナムの附いた例は極めて少ない。

(4)　客語―体言―と―思ふ

	万	古	土	源
を	19(5)	15(6)	1(1)	56(24)
ナシ	3(2)	2	0	8(29)

(2)項と同じことなので，用例だけをあげる。

46　今日を限りと思へば（真木柱三 133）

47　かの見つるさきざきの△（河本「を」）桜山吹と言はば，これは藤の花とやいふべからむ（野分三62）

「を―ば，ぞ，こそ，なむ，だに」が19例もあることも，前と同様である。

(5)　客語―体言―に―思ふ

	万	古	土	源
を	3(1)	0	0	85(45)
ナシ	2(0)	0	0	5(24)

48　身の有様を口惜しきものに思ひ知りて（須磨二48）

49　かくうしろめたき筋のこと△憂きものにおぼし知りて（若菜下三 401）

前項の間接話法である。「を―ば，ぞ，こそ，だに」が32例もあることも前と同じである。

万葉集や古今集，散文である祝詞でも，(4)の形式は非常に多く，(5)の形式は稀であるが，源氏物語では(5)の形式の方が多い。源氏物語では間接話法が多く用いられる傾向があったようである。婉曲を好む傾向によるものであろうか。

(6)　客語―体言―と―す

	万	古	土	源
を	2	0	0	13(1)
ナシ	0	0	0	0(2)

50　これを初めの難とすべし（帚木一63）

この形式は，対象と動作を結合する力が強いと思われる。それで卓示の言い方が少ないのであろ

う。題目として提示して述語に係る場合はある。

51　心は心として（帚木一60）

現代語の「それはそれとして」と同じく，題目意識であって，対象意識は稀薄である。

(7)　客語—体言—に—す

	万	古	土	源
を	10(1)	2(2)	1	29(21)
ナシ	2	0	0	4(20)

52　あやしき身一つを頼もし人にする人なむ侍れど（若紫一 195）

53　櫛の箱一よろひ，衣箱一よろひ△贈物にせさせ給へり（蜻蛉五 299）

前項の間接話法である。前項より卓示になりやすかったようである。「△△に○○をす」は5例あるが，助詞ナシはこの語順の例はなく，文初に用いられた例だけである。また「を—ば，こそ，だに」が18例もある。

祝詞では前項の例はかなり多く，(7)項の例は少ないが，源氏物語では逆で，間接話法の例が多くなっていること，(2)項と(3)項，(4)項と(5)項と同様である。

(8)　客語—体言—にて

	万	古	土	源
を	0	4	0	68(39)
ナシ	0	0	0	3(20)

前項の縮約形である。

54　これを題にて歌よめ（古 930）

55　かたじけなき御心ばへの類なきを頼みにて交らひ給ふ（桐壺一28）

56　左近の将監なる人△御使にて…と宣ふ（橋姫四 324）

「を—ば，ぞ」が29例もあり，殊に「○○—さるものにて」は，ヲ1例．ヲバ25例，ハ11例，助詞ナシ零で，ハ11例もヲバの異文のある例だけである。「さるものにて」は，対象との結合が固く，そしてその対象を他から分立して強調する気持が強かった，それで対象を独立的に卓示することが少なかったと思われる。

以上，(2)～(8)の形式は，何をそう思うかが重要で，処置される対象と処置する動作との関係が強く意識されるので，卓示される少数のほかは，ヲをとることが多かった。

(9)　客語—主語—述語

	万	古	土	源
を	89(16)	18(6)	12	257(39)
ナシ	47(17)	8(4)	1	29(65)

57　人がらのあはれに情ありし御心を，上の女房たちも恋ひ偲びあへり（桐壺一33）

58　御禄の物△上の命婦取りて賜ふ（桐壺一49）

日本語は「主語—客語—述語」の語順が普通で，客語を先に言うのは客語に重みを置いた言い方である。それには，独立的に卓示して助詞ナシに言う場合と，主体の処置の対象としての意識が強く，動詞との結合が固い場合とがあるが，主体を文面に表わすような場合は後者の言い方になるのが普通であったのである。(2)〜(8)と類似の構造である。

6　表現の性質によるもの

(1)　「かな」感動文

	万	古	土	源
を	31(1)	9 (1)	2	36(10)
ナシ	7(4)	1 (1)	1	1 (2)

59　新喪のごともね△泣きつるかも（万1609）

60　この君の，いとさしも親しからぬ継母の御事をいたく心△しめ給へるかな（若菜下三 384）

61　越えぬまは吉野の山の桜花△人づてにのみ聞きわたるかな（古 588）

59の，「ね泣く」は一語のようになっている。60の「心しめ」も二重客語の近い方の関係である。これらは動詞に包まれる関係になる。61は卓示である。

しかしそれより，ヲをとる文が多い。

62　鳴る神の音のみ聞きし巻向の桧原の山を今日見つるかも（万1092）

63　棹させど底ひも知らぬわたつみの深き心を君に見るかな（土12月27日）

64　遂に来し方行く先もためしあらじと覚ゆる悲しさを見つるかな（御法四 188）

かねて見たいと思っていた桧原の山，深い親切心を，思いがけなく見た，という気持である。熱望していたもの，通常と甚だしく異なるもの，意外なものをそうするというところに，喜びや悲しみの感動がひき起こされるのであり，そのような対象は強く意識されるので，ヲをとることが多い。

65　目に近く移れば変る世の中を行く末遠く頼みけるかな（若菜上三 248）

66　とみにせさすべくもあらず皆言ひ知らせ給へる事を嬉しくもしつるかな（手習五 391）

事物の性質から予期される事柄と現実の動作とが食いちがう場合である。食いちがう事物であるのにそうするということのために，詠嘆の情が深くなる。そのような事物は対象として強く意識されるので，ヲをとることが多い。

(2)　「こと」感動文

同様なことがコトで終止する感動文についても言える。

	万	古	土	源
を	0	0	0	20(3)
ナシ	0	0	0	1 (1)

67　「一条の宮△渡し奉り給へること」と（河本「を」）かの大殿わたりに聞ゆる（夕霧四 152）

68　世の人「飽かず盛りの御世をかくのがれ給ふこと」と惜しみ歎けど（若菜下三 326）

69　「今は怠り果て給ひにたる（紫上ノ）御あつかひに心を入れ給へること」（若菜下三 394）

67は一条の宮を渡すという事実を平板に述べたのであるが，68，69は，盛りの世であるのに，そんな心はいらないのに，という気持であって，それ故に，世をのがれること，心を入れることに感動が生ずるのである。

(3)　「ばや」希求文

	万	古	土	源
を	0	1	0	21(5)
ナシ	0	0	0	2

70　暫しにても例になして，思ひつる事ども△語らはばや（総角四 460）

71　時々は世の常なる御気色を見ばや（若紫一 202）

(4)　「がな」希求文

	万	古	土	源
を	3	1	0	5(10)
ナシ	1(2)	2	0	6

バヤ希求文は，何をそうしたいか，対象を処置する気持の強い場合が多かったのだと思われる。が，ガナ希求文は，実現が困難を予想されることを希求する場合で，対象を卓示することが多かったので，助詞ナシが比較的多いのであろう。

72　つつましき事なからむ（女）△見つけてしがな（末摘花一 235）

73　かのありし猫をだに得てしがな（若菜下三 318）

実現困難な希求なので「せめて…でも」という意味になりやすいが，その場合，対象は強く意識されるので，ヲダニのようにヲをとることが多い。

(5)　疑問文

	万	古	土	源
を	57(2)	24(2)	1	132(62)
ナシ	29(3)	3(1)	0	12(53)

上表の数字は疑問詞（数詞・代名詞・副詞）のある場合に限った。ただし，疑問詞が客語である場合と疑問詞が条件句にある場合は除いた。

74　いつまた対面△賜はらむとすらむ（須磨二51）

75　御返り△いかが物し侍らむ（須磨二27）

76　君だちの御事△何か思し歎くべき（椎本四 353）

74は動詞に包まれる場合，75・76は卓示である。が疑問表現では，感動表現と同じく，その対象をいかに処置するかということに関心が強い場合が多いので，ヲをとることが多い。「を―ば，だに，しも」が25例もある。助詞ナシの方はハ・モ・ナドだけである。

77　そのけぢめをばいかが分くべき（帚木一59）

万葉集は源氏物語より助詞ナシが比較的に多い。万葉集では，主語や疑問詞が強調されて客語は

動詞に包まれる言い方と卓示とが源氏物語より多い。歌と散文との違いによるものであろう。

(6)　命令文

	万	古	土	源
を	30(1)	4 (3)	1	63(23)
ナシ	60(10)	7 (1)	5	89(28)

助詞ナシがやや多い程度である。

78　なほ聊か物△宣へ（手習五 348）

79　この人の宮仕への本意△必ず遂げさせ奉れ（桐壺—37）

80　かれ△見給へ。いとはかなけれど，千年を経べき緑の深さを（浮舟五 237）

78は客語が動詞に包まれる場合，79・80は卓示である。80は，まず急いで「かれ」と指示して，ちょっと叙述を中断して命令を述べ，改めて「緑の深さを」と，処置すべき対象を補った言い方である。このように，急いで指示して卓示する言い方が指示代名詞には多い。(コレ・カレ・ソレで，を2例，助詞ナシ14例)。

81　心よりほかにえ見ざらむ程は，これを見給へよ（浮舟五 223）

80に比べて，落ちついた口調である。

一人称・二人称代名詞はヲをとることが多い。(源氏　を3例，助詞ナシ零，万葉　を6例，助詞ナシ1例)。

82　内侍のかみにおのれを申しなし給へ（行幸三94）

誰をどうするかということに関心の強い言い方である。

(7)　禁止文

	万	古	土	源
を	30(1)	3	0	10(1)
ナシ	35(6)	4 (2)	0	50(6)

禁止表現には「な何そ」と「何な」がある。あゆひ抄の,「何な」は固く禁止する意味,「な何そ」はそれより緩やかで「てくれるな」の意味，という説がほぼ認められている。客語との関係は，両者ともヲと助詞ナシがほぼ同数くらい用いられている。

83　（亡キ母ノ）御面伏せに，軽々しき心ども△使ひ給ふな。おぼろけのよすがならで，人の言に靡き，この山里をあくがれ給ふな（椎本四 350）

助詞ナシとヲの両者が用いられているが，助詞ナシの「軽々しき心ども」は叙述をちょっと中断してそれを卓示する気持であり，ヲの方は「この山里」をどう処置するかに関心の強い言い方である。

84　われ△人に見すな（浮舟五 217）

85　馴れ来つる真木の柱はわれを忘るな（真木柱三 135）

84はせっかちに自分を卓示する場合，85はほかならぬ自分をどう処置するかに関心を持つ場合である。

「客語—主語（禁止の相手）—述語」の形式では，

86　野山の浅茅△人な刈りそね（万1347）

のように，卓示されて助詞ナシになることもあるが，

87　いで我を人なとがめそ（古 508）

88　逢坂山を霧な隔てそ（賢木一 375）

のように，ヲをとり，「な何そ」になるのが普通である。5の(9)項と同じ理由による。

禁止表現では対象を卓示することが多く，助詞ナシが多い。そして源氏物語では万葉集より助詞ナシが多くなっている。会話ではとっさに卓示することが多く，歌では対象と動作との関係を明示しようとするからであろう。源氏物語でもヲ10例のうちの5例が歌である。万葉集と源氏物語における使用差も，歌と散文との違いによるものであろう。

7　連体法・準体言・終止法

客語に動詞が直ちに接するものを直接，語を隔てて接するものを隔接とすれば，ヲ・助詞ナシの用例は次の表のようである。

		万		古		土		源	
		を	ナシ	を	ナシ	を	ナシ	を	ナシ
連体	直	101	304(10)	39	68	4(1)	9	548(62)	707(120)
	隔	27	10(2)	7	1	0	0	187(44)	31(24)
準体	直	19(2)	17	9	1	3	2	426(59)	265(53)
	隔	10	1	3(1)	1	2	0	173(41)	26(26)
終止	直	252(66)	341(119)	52(24)	28(39)	17(11)	26(6)	471(297)	577(372)
	隔	185(28)	80(35)	59(26)	22(11)	0 (1)	7	590(236)	168(318)
命令	直	19(1)	49(6)	2(3)	6(1)	1	2	40(17)	76(21)
	隔	11	11(4)	2	1	0	3	23(6)	13(7)
禁止	直	16(1)	31(6)	2	4 (1)	0	0	6(1)	42(5)
	隔	14	4	1	0(1)	0	0	4	8 (1)

古今詞　終止	直	を	51(1)	ナシ	6
	隔	を	1	ナシ	0

上表によれば，

(1)　源氏物語では万葉集より助詞ナシに対するヲの使用率が高くなっている。源氏物語では，終止直接は「を—助詞」を含めると助詞ナシより多く，連体直接でも万葉集ほど助詞ナシとの差が大きくない。古今集詞書の終止直接のヲ使用が，源氏物語に比べても甚だしく多いのは，規格に統一された文体であったからであろうが，ヲを用いるのが当時の公式文書の標準的文体であったこと

101は，独立的にすることによって「君だちの御事」を卓示する。102は，話題の「宮の御事」をどう処置するか，それに重みを置いて，それと動詞との関係に関心を持つ言い方である。隔接では，助詞ナシは卓示になるが，それよりも，主語や形容詞や疑問詞などが間に入って，対象をどう処置するか，動詞との関係に関心の強い場合が遙かに多いので，ヲが圧倒的に多いのである。

以上，ヲと助詞ナシとの使用傾向に著しい差違のある，語と語との関係，文の構造，文の表現の性質を見た。助詞ナシが多く用いられるのは，客語が動詞から独立的に卓示される場合と，一語のように機能したり平板に事象を述べたりして，客語が動詞に包まれる場合とである。ヲが多く用いられるのは，処置の対象として強く意識されそれに重みがおかれて，動詞と対立的立場に立ちつつ固く結合する場合である。従ってヲを用いる場合は，卓示より動詞との結合が緊密であり，包まれる場合より対立的で客語に重みがある。

処置の対象として動作と対立的に意識することは，話し手の感情がこもることになる。「物を思ひけり」は，「物△思ひけり」より「物」に対して話し手の感情がこもっている場合なのである。

そのような感情は，対象に対して予期することと動作とに食いちがいがある場合に感じられることが多い。

103 目に近く移れば変る世の中を行く末遠く頼みけるかな（若菜上三 248）

104 （柏木八）いとさばかり思ひあがりおよすげたりし身を，心もて失ひつるよ（柏木四40）

頼りにならない世の中であるのに，それを頼りにしたという，「世の中」と「頼む」との不一致の認識と，それに伴う後悔の気持とがある。カナ・ヨなどが附いて感動文になることが多いが，その詠嘆の情に応ずるのである。

この場合，事物は処置の対象として強く意識されがちなので，ヲをとることが多い。が文としては客述関係であって，詠嘆的な逆接の気持は，客語と動詞との不一致という文脈に附随するものである。が，不一致の客語と動詞との結合点がヲなので，ヲに逆接の意味が生ずることになる。これはガ・ニ・ノ（モノノ）などが格助詞から接続助詞に転化したのと同様な転化である。

このような文は，不一致感の故に詠嘆的である。殊に下文を省略する場合は，省略ということのために，詠嘆は更に深くなる。現代語でも「私があんなに注意したのに」と言えば，上下文の逆接関係のほかに，下文省略のために詠嘆が深くなる。が，ノニが感動を表わすとは言えない。感動は，省略を含めて，表現全体から感じられるものである。と同様に，ヲが，殊に下文省略のヲが，感動の意味を表わすとは言えない。

感動・希求・疑問の文ではヲが多く用いられる。広井氏，小山氏の調査によれば，感情的場面にヲが多く用いられているという。がその事から，ヲは感動を表わす，とは直ちに言えない。そのような文や場面では，ヲを用いるような構造の文が多く用いられるのだとも言えるからである。

日本語では，実質概念→形式概念，自立語→格助詞（ヘ，カラ），格助詞→接続助詞（ガ・ニ・モノノ）自立語→感動詞（モシ・コラッ）のように，実質的なものから形式的なものへ，客観的な表現から話し

手の主観表現へ転ずる語は多いが，その逆はほとんどない。また，感動詞・感動助詞は，格助詞は勿論，係助詞の上に来ることはないので，感動助詞が格助詞に転ずることは考えにくいことである。とすれば，ヲは格助詞であって，感動の意味はそれに附随して感じられるのだというように考えられる。

しかしこの事は，感動助詞のヲが，格助詞から転じたのだと言うのではない。それは，感動の意味が附随的に感じられる格・接続助詞とは切り離して考えるべきだと思うのである。感動助詞のヲと格・接続助詞のヲは同一原語に由来するかも知れないし，全然別の語源かも知れない。要するに語源関係は不明なのだと思う。

注1　源氏物語の引例は，本文は対校源氏物語により，ページ数は日本古典文学大系を示す。

2　表の数字はすべて，ナシ（格助詞ナシ）は助詞のない場合に限った。それとの釣合い上，ヲも他の助詞のない場合に限った。助詞の附いた例の数は，参考になると思われる場合，カッコに入れて示した。

また,「船出―す」のような，動作内容に「す」が附いた場合は除いた。語を隔てて「す」が附く場合も原則として除いた。「事」「わざ」などもそれに準じた。それとの釣合い上，ヲが附いた動作内容の語の場合も原則として除いた。

3　「旅ゆく―体言」はすべて助詞ナシであるが，表から除いてある。

（附記）　本稿の大部分は昭和39年10月「西日本国語国文学会」で発表したものである。